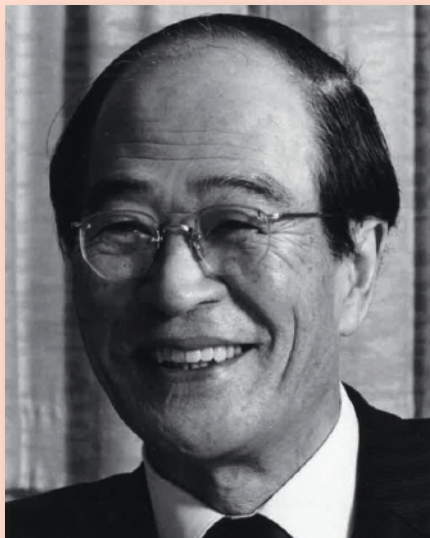




南条 範夫

山口市

(1908～2004)



提供・古賀正子

【著作】

『燈台鬼』（昭和31・河出書房）

『暁の群像 豪商 岩崎弥太郎の生涯』（昭和39・講談社）

『細香日記』（昭和56・講談社）

ほか

萩市立萩図書館

☎083812516355

南条範夫（本名・古賀英正）は、明治四十一年（一九〇八）十一月十四日、東京・銀座に生まれた。大正五年（一九一六）、税関の眼科医であった父が中国の青島に転勤したのに伴い、青島日本人学校に転入した。大正十三年（一九二四）、旧制山口高校に進み、昭和二年（一九二七）、東京帝国大学法学部に、さらに経済学部でも学び、昭和八年（一九三三）に卒業、経済学部の助手となった。しかし、時勢は学究に沿わず、昭和十一年満鉄調査部、次いで日本出版文化協会に移った。昭和十八年（一九四三）、軍属として中国・上海で経済工作に当たり翌年辛くも帰国した。戦後、國學院大學と中央大学の教授を兼任し、「金融論」「銀行論」「貨幣論」などを講じた。

小説は余技であったが、雑誌に応募した作品『出べそ物語』『子守の殿』『あやつり組由来記』などが次々に入選し、昭和三十一年（一九五六）『燈台鬼』が第三十五回直木賞を受けると、大衆文学に新分野を開拓したと評価され、原稿依頼が相次いだ。以降、学者と作家を両立させることになった。

人間の内面に迫る意欲的な作品を次々に発表し、昭和三十年代、『残酷物語』等で、『残酷ブーム』を巻き起こし、また『無頼武士道』など一連の時代小説では、五味康祐、柴田錬三郎とともに、『剣豪小説ブーム』を作った。更に『細香日記』『五代將軍』などの伝記的歴史小説は、独特の視点と表現で読者を魅了した。

尾崎秀樹は「南条範夫の登場は、大衆文学の現代化に先鞭をつけるものであり、出世作『燈台鬼』の残酷なりアリズムと作品の現代性が、南条文学の二つの函数をなす」と評している。

南条は多感な青春期を山口で過ごしたことが、歴史作家への心象の出発点であり、また戦争時に触れた普通の人間の内奥の残酷性も作品構成の根底にあると語っている。

南条は『高杉晋作』など長州モノを含め膨大な数の作品を書いたが、日本文芸家協会が推奨する代表作時代小説に、昭和三十二年（一九五七）から平成十四年（二〇〇二）まで、四十五年間毎年推奨されたことは稀有なことである。『大衆文壇の巨匠』と称された所以でもある。

平成十六年（二〇〇四）十月三十日、永眠した。

（文・高木正熙）



ある日の南条夫妻（昭和42年）



旧制山口高校時代（昭和2年）